

千葉市史編さん担当

〒 260-0856
千葉市中央区亥鼻 1-6-1
千葉市立郷土博物館
TEL 043-222-8231



新聞にみる
千葉のむかし

寒川監獄と囚人たち

編さん便りNo.10・12に引き続き、明治期の新聞から「ちょっと気になる」記事をピックアップしてご紹介いたします。
今回ご紹介する記事のキーワードは、「監獄」です。

『千葉繁昌記』などに見る寒川監獄

現在は貝塚町にある千葉刑務所は、明治40年(1907)までは千葉町大字寒川にありました。もともとは佐倉藩の米蔵であったところですが、明治7年(1874)に千葉町の大日寺境内にあった仮監獄所が火災で焼失したため、ここを監獄として使用したといわれています。下の写真は、移転新築された当時の赤煉瓦造りの管理棟です。この管理棟は、全国の主要な刑務所を手がけた山下啓次郎の設計によるもので、明治35年に着工してから、途中日露戦争による中断を経て、5年の歳月をかけて建てられました。

明治44年発行の『千葉街案内』から、この移転時の様子が見えます。当時の金額にして30万1056円以上の巨費を投じて建築されたこと、建造にあたっては、「概ね囚人を使役して工事に従」ったこと(煉瓦を焼くのも積むのも囚人がおこないました。職業訓練を兼ねていたのでしょうか)、敷地面積は庭

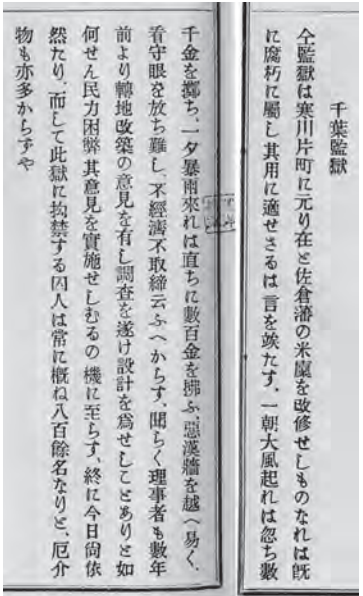


「千葉監獄」(多田屋書店発行、絵はがき)

園を含め26,325坪、監房数は510房・収監人数はおよそ1200名、職員は147名と、非常に大きな施設であったことなどがわかります。また、監内に発電所を設けている旨も書かれています。

では、寒川にあったころの監獄は、どんな状況だったのでしょうか。『公文別録・甲武地方巡察使復命書 明治十六年 第一巻』『千葉県ノ部監獄』では、明治16年当時「千葉郡寒川村ニ監獄本署ヲ置キ…裁判所之在ノ地ナリ」と寒川に監獄本署が置かれていたこと、寒川監獄に未決囚158名・既決囚531名(明治16年1月現在、千葉県全体では未決囚194名・既決囚683名)が収監されていたことなどがわかります。
次に、明治・大正ごろの千葉町のような様子を知ることが出来る『千葉繁昌記』から監獄の記載をみてみましょう。『千葉繁昌記』は明治24年に千葉寺の君塚辰之助によって発行されたものと、同28年に藤井三郎が発行したものと二種類ありますが、君塚発行のものに、右下のような記事があります。

ここでは、寒川の監獄が佐倉藩の「米廩」を改修したもので、老朽化が激しいことが記されています。実際に着工されたのは35年ですが、少なくとも10年前の段階で、既に移転・新築の必要があると考えられていたことがわかります。「厄介物も亦多からずや」との結びから、周辺地域への影響についても懸念されているような印象をうけます。✓



「千葉監獄」(『千葉繁昌記』(明治24年発行)より)

平成27年度 千葉市史主催 講座のご案内

1 市史研究講座「千葉市の歴史を学ぶ」

定員 200名。会場；千葉市生涯学習センター2Fホール
対象；千葉市に在住・在勤・在学の方。
全2回(1回2講演、各講演80分)。
講演1；13:30～14:50、講演2；15:10～16:30
日程及び各回のテーマ(全て現状では仮題)は以下の通り。

第1回 9/26 (土)	1	鹿島・香取について 吉井 哲 先生(千葉市史編集委員)
古代・中世	2	房総の戦国時代―千葉氏と里見氏― 滝川 恒昭先生(千葉市史編集委員)
第2回 10/24 (土)	1	"大名評判記"にみえる房総大名について ―生実藩・森川氏を中心に― 小関 悠一郎先生 (千葉大学教育学部准教授)
近世・近現代	2	千葉市夜明け前～大正期の千葉町～ 神山 知徳先生(千葉市史編集委員)

*市政だよりにて募集します。

2 古文書講座

初級古文書講座

「江戸時代の村の史料を読む」(仮)

古文書解読初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。
全6回。講師は小代渉先生(柏書房株式会社編集部)。
日程は5/2・5/30・6/6・7/4・8/1・8/29(いずれも土曜日)。
同じ内容で午前・午後の部の2回に分けて開催。
午前は10:00～12:00、午後は13:30～15:30。
*市政だより(4月1日号)にて募集します。

中級古文書講座

「江戸時代の村の史料を読む」(仮)

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全6回。
講師は後藤雅知先生(立教大学文学部教授、千葉市史編集委員)。日程は未定(市政だよりにて募集予定)。

*詳しい日程は市政だより・郷土博物館HP等でお知らせいたします。
*古文書講座初級(午前・午後とも)・中級いずれも定員は40名、会場は千葉市立郷土博物館講座室です。

どの講座も往復葉書・電子申請でのお申し込みです。

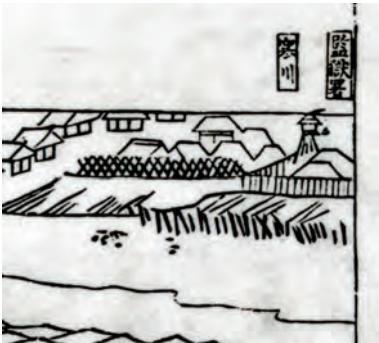
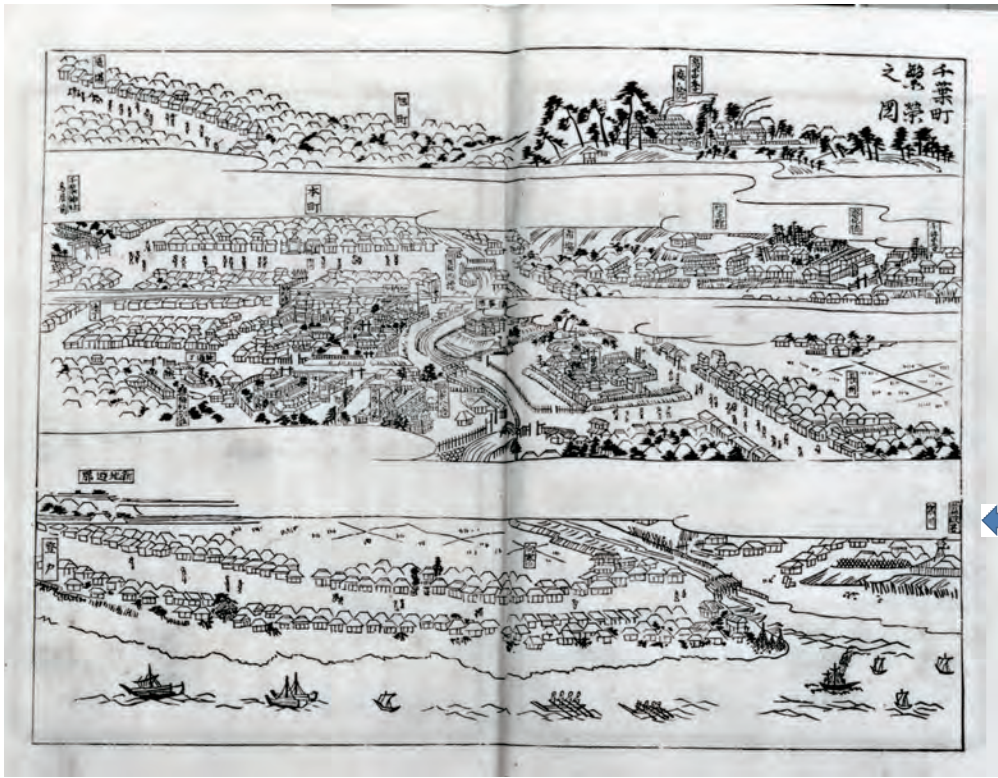
住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記のうえお申し込みください(葉書の場合、一枚につき一人の応募)。
電子申請の方法を含め、その他詳細は市政だより・千葉市立郷土博物館HPにてご確認ください。

http://www.city.chiba.jp/edl/kyodo/kyodo_top.html

※申込み多数の場合、抽選となります。

資料、
求ム。

『千葉市史』編さんのため、古い資料・昔の写真などの情報を集めています。
ご家庭で撮影されたスナップ写真も、当時の「千葉」をみることができる貴重な資料です。
いわゆる「古文書」も大歓迎です。
聞き取り調査も行ってみたいと思っています。戦時中の体験など、幼い頃の記憶など、千葉市域に関してお話をただける方がおられましたら、ご連絡ください。
ご提供頂いた資料、伺ったお話の内容の扱いには、十分配慮致します。
皆さまからの情報提供をお待ちしています。



「千葉町繁栄之図」
 (『千葉繁昌記』〈明治 24 年発行)より)
 ＊上図は矢印付近の拡大。



10 月 24 日の記事によれば、この寒川監獄内での腸チフスについては完全に撲滅されたと報じられています。4 月ごろからおよそ半年間にわたる長期の流行でした。

しかし、同年 12 月に鴻之台（市川市国府台）にて教導団兵営新築工事に従事していた囚人 300 名と役人の中に腸チフス患者が発生、この治療のため穴川に避病院が建てられたと報じられています。監獄内の流行は下火になったとはいえ、その後も尾を引いていたようです。

流行病では、周辺地域への影響・周辺地域からの影響も懸念されます。周辺地域への拡大を懸念するような記事もちろんありますが、次の記事は逆に監獄「近辺」で疫病が流行ったため、予防のため寒川の「懲役人」を加村（流山市）・佐倉の二ヶ所へ移したと報じています。「罪人にまで斯く御注意なさる」ことが有難いとしており、多分に御用提灯の記事ではありますが、伝染病に対しての対応のひとつとして、興味深いものがあります。

こうした伝染病の流行が、寒川が低地であることにも起因するとして、先にあげた建物の老朽化による管理の難しさともあいまって、明治 40 年の新築・移転につながっていきました。

【職業訓練】

現在でも、刑務所へ収監されている人たちは職業訓練を受けますが、当時も同様に職業訓練が行われていました。千葉監獄の移転時の工事そのひとつと考えられますが、ほかにもさまざまな訓練が行われていました。明治 27 年 8 月現在の調べ（藤井三郎発行『千葉繁昌記』より、括弧内は人数）では、抄紙工（163）・簾工（5）・機織工（98）・染工（3）・

裁縫（24）・麻工（49）・鍛冶工・鉄業工（1）・理髪工（1）・木工（9）・米麦搗工・水引工・罫紙摺工・外役土工・藁工（145）・小亀形工（42）・陶器工（29）・炊夫工（19）・看病夫工（4）・掃除夫工（27）が書き上げられています。服役中は、こうした工業に従事し、100 日を過ぎれば各自に工銭の一部が与えられることになっていました。

また、16 歳未満の受刑者や懲治人については、毎日 4 時間以内で読書・習字・算術（いわゆる 3 R's）を教授するなどの措置がとられています。これについては、新聞にも掲載されているので記事を見てみましょう。これによれば、監獄内に学問所を設け、「掛り役員」（監獄の署員か）の柏木という人物が教師役をしている旨が書かれています。囚人たちも熱心に勉強している様子が書かれています。

こうした職業訓練の一環として、現在の国道 14 号線の一部（稲毛～登戸）も寒川監獄の囚人らによって新設されました。

道路の工事が開始されたのは明治 17 年 10 月。寒川監獄から毎回 100 名ずつが従事していたとされています。工事は着々と進み、翌年 1 月には開道式が盛大に執り行われ、その様子も報道されています（右の記事）。

しかし式典後も「馬車止」（通行止めか）の状態が続き、わずか三日で「皆修築」することとなりました。当時の土木技術の限界なのか、あるいは囚人たちの勤務態度が影響しているのか、詳細はわかりませんが、修復をしているさなか、囚人が逃亡している記事も散見されます（左の記事など）。

【監獄移転に際しての千葉町役場の動き】

当時の千葉町役場にとっては、監獄はどのような存在だったのでしょうか。6 代千葉町長となった加藤久太郎は、著書『在職四年間』（明治 44 年発行）の中で、「旧監獄敷地交換」として次のような文章を書いています。旧監獄跡敷地交換に関しては。町は終局の方針を立て代地を提供して。之を遂行せんとなし。…第三回目に鈴木利右衛門氏所有の都村大字貝塚字野田出の

畑地及山林にて一万九千四百三十二坪の代地を提出して交換せんと爾来監獄署へ数回出頭陳述せり。町長及委員は交る々々司法省に出頭して。…採用あらん事を請へり。時に永井某。鈴木某。植草某。等三氏より監獄署近接の畑地式町九反四畝二十三歩。山林式反拾壹歩を以て。之を代地となし交換を出願せり。…

加藤町長ら町役場や町会議員らで組織された委員たちは、監獄敷地の交換をするために、監獄署や司法省へさまざまな働きかけをしていたようです。この裏で、単独で動いていた永井・鈴木・植草といった人物が、結局有利にことをはこんでいたことが判明、仲裁人を通して

…永井氏他二氏より町へ金貳千円を寄贈せしめ。以て町は其権利を譲る事にせんとて。両氏より之を各委員に交渉せり。委員は数十回の会議を経。且町会に於ては町は一立ちし交換の貫徹を欲すれども。今日互に鷸蛙の争を為すは。却て漁夫の利となる恐れあれは一先之を譲るべきも。監獄よりは町の名儀を以て之が交換を為し。…

と、町がまず監獄より敷地を受け取り、それを町長の名義としたうえで永井ほか二名へ譲るという方法をとることになりました。

結果として、千葉監獄は都町に設置されるので、このときの「監獄署近接の畑地」との交換がどう変更されたかについては、この文章は不明ですが、あくまで千葉町役場が旧監獄の敷地交換のイニシアチブをとろうとしていたということでしょうか。

今回は寒川監獄について明治 10 ～ 20 年代を中心に、細かなトピックスを集めてみました。他にもいろいろな記事があり、例えば明治 18 年の記事では千葉監獄署内での経費節減についての意見が書かれています。ここでは、収監者の減少が一番の経費節減になるなど、現在の刑務所が抱えている問題とよく似た状況が見られます。明治 40 年の移転後（大正 11 年には千葉刑務所となる）の監獄の様子についても、興味深い記事があれば随時ご紹介していければと思います。

『千葉いまむかし』28 号では「明治千葉町の修学旅行」と題し、当時の修学旅行に関係する新聞記事を紹介・解説しています。こちらもご一読いただけたら幸いです。

＊今回主に使用した『千葉公報』は、発刊当時（明治 16 年ごろ）は論説を全く持たない小型紙でした。新聞社の所在地は千葉郡寒川村ということで、寒川監獄に対する記事が多かったのかもしれませんが。創刊二周年で『千葉新報』と題字を変更、政治問題を扱うのには慎重な姿勢をとっている新聞でした。（参考：社団法人日本新聞協会編『地方別 日本新聞史』昭和 31 年発行）。

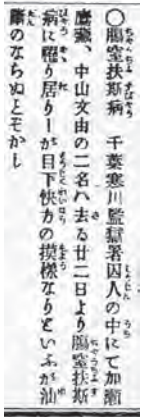
▽ 同じ君塚の『千葉繁昌記』の中の図版「千葉町繁栄之図」にも「寒川」の海岸沿いに「監獄署」の文字が見え、見張り台のようなものを備えた壁に囲われた建物を見ることができます（上図）。

【伝染病流行への対応】

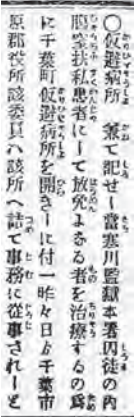
集団で生活している以上、監獄内で病気が流行るのは必然です。ましてや、閉鎖された空間に大人数が生活することから、その被害は畢竟大きなものにならざるを得ません。

左にあげた記事は、明治 17 年に腸チフスが監獄内で流行したときのものです。囚人二名が腸チフスに罹ったことが報じられています。他の記事によると、一時は 140 名もの腸チフス患者が発生したということですので、明治 16 年段階で 670 名ほどを収監していたことを考えると、監獄内でおよそ二割の人間が感染したことになります。

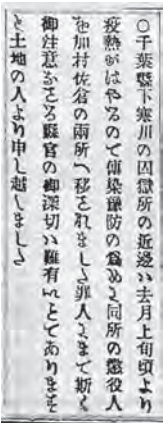
こうした事態に際し、腸チフスに罹患した囚人のうち放免となる者を対象として、千葉町に仮避病所が設置されました。右の記事は設置を報じたものです。「放免」つまり刑期を終えてでることができる者のみの避病所、いわゆる隔離施設を設置しなければならぬほどの流行が起きていたと推測できます。



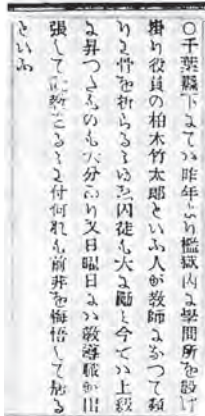
「腸瘻扶斯病」
 『千葉公報』
 明治 17.4.30



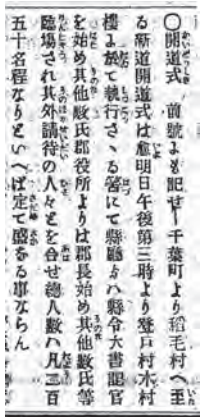
「仮避病所」
 『千葉公報』
 明治 17.9.23



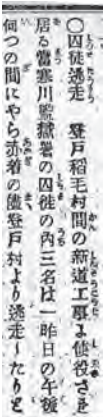
『朝野新聞』明治 9.4.8



『朝野新聞』明治 10.4.26



「開道式」『千葉公報』
 明治 18.1.25



「囚徒逃走」
 『千葉公報』
 明治 18.2.3